

イエスと弟子トマス

Jesus and Thomas the Apostle

第3回 「網を海に投じた賢い漁夫」

text: 宝彩有菜

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺のなから奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話で、イエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第3回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中断、下段の順に

- (1) Thomas O. Lambdin による英訳
- (2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳
- (3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳の順に記載しています。

■ (No.008)

(8) And he said, "The man is like a wise fisherman who cast his net into the sea and drew it up from the sea full of small fish. Among them the wise fisherman found a fine large fish. He threw all the small fish back into the sea and chose the large fish without difficulty. Whoever has ears to hear, let him hear."

(8) And he said, "The person is like a wise fisherman who cast his net into the sea and drew it up from the sea full of little fish. Among them the wise fisherman discovered a fine large fish. He threw all the little fish back into the sea, and easily chose the large fish. Anyone here with two good ears had better listen!"

(8) そして彼が言った、「人間はその網を海に投じた賢い漁夫のようなものである。彼はそれを小魚で満たして、海から引き上げた。それらの中に彼は、一匹の大きな良い魚を見出した。つまり、賢い漁夫がである。彼は小魚を全部海に投じた。彼は大きな魚を選び出して、苦労するところがなかった。聞く耳あるものは聞くがよい」

「笑雲先生、この大きな魚のたとえば、マタイの福音書の13章にもありますね」

「そうだね。並行箇所があるセンテンスだ」

「マタイの福音書の方は、『また、天の国は、次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。』となっています」

「なるほど。内容は同じように読めるが、例えた対象が、トマスの方は、『人間は』であり、マタイの方は、『天の国は』になっているね」

「何を例えたのか、対象がはっきりしないと、何を言いたいのか意味がわかりませんね。笑雲先生」

「そうだね。イエスは同じことを言ったはずだが、それを、マタイとトマスでは違って聞いているわけだ。一方は、『人間』の例えとして、一方は『天の国』の例えとして」

「笑雲先生。ちなみに、マタイの福音書に『天の国』は、33回登場してきますね」

「そうかい、小松茸、よく数えたね。それでは、ついでに、マルコの福音書では、『天の国』は何回出てくるのかい」

「マルコの福音書には、『天の国』はゼロ回です。出てきません」

「おや、そうかい、でも、並行箇所もたくさんあるから、同じ例えもあるのではないかい？」

「はい、このトマスの8番は並行していませんが、共観福音書、およびトマスの福音書との並行箇所は、たくさんあります。その場合は、全部『神の国』となっています」

「そうかい。では、『神の国』は、何回出てくるのかい」

「『神の国』は、14回ですね」

「なるほど。なんか変な感じだね。そんな重要なポイントの言葉が、マルコとマタイの二人で、違うなんて。同じであってしかるべきなのに」

「そうですね。変ですね。英訳では、“The Kingdom of heaven” と “The Kingdom of God” になっています」

「それは、なんだか、後で誰かが一括で変更したような感じだね」

「どうして、そう思われるのですか、笑雲先生」

「いいかい、小松茸、もし、同じ話を、マルコも、マタイも、トマスも聞いたとする」

「はい、多分、そうだと思います。弟子ですし、一緒に聞いたと思います。例えの内容はほぼ同じですから」

「そうだね。同時に同じ話を聞いたとすると、さっきの話は、『天の国』の話だったとか、『神の国』の話だったとか、『人間』の話だったと分かれるのは、おかしいね。一番重要なところなのに。また、よしんば分かれたとしても、福音書の全編通して、マタイは『天の国』一本槍であり、全編通してマルコは『神の国』一本槍ということも、さらにおかしいね。とても不自然だね」

「そうですね」

「でも、誰かが、後から、福音書を見比べながら、一律にマルコは『天の国』にしよう。マタイは、『神の国』にしよう。と、変換したのなら、有りうる話だと笑雲は思うね。それならこのようなことは起こり得る。というか、それ以外考えられないね」

「あとから、誰かが一律に変えてしまったのではないかということですね。なるほど」

「う～ん、そうだね。それならありうると思う」

「なるほど。では、笑雲先生、『天の国』や『神の国』の元は何だったのでしょうかねえ」

「さて、なんだったのだろう。前にも言ったけど、おそらく『瞑想』や『修行』の話をしたのではないかと思う。トマスのこのこのセンテンスには、『天の国』とも『神の国』とも、対象が書かれてなくて、『人間は』になっている」

「そうですね」

「たぶん、もともとは、『天の国』の話でもない『神の国』の話でもなく、心の働き方の説明だったのではないかと思う。『人間は』は近いね。もし、心の働きの話だと仮定すると、とても、良い例えで、とても綺麗に説明できる」

「なるほど」

「でも、瞑想や修行といっても内容は様々だし、それを誰にも分かり易く説明することは、とても難しい」

「そうですね」

「でも、イエスは、頑張ってひとつひとつ丁寧に説明していたのだろうと思う。だから、このようにたくさんの例え話が残っているわけだ」

「具体的には、どんなことを話していたのでしょうかね」

「たとえば、マインドの仕組みについてだとか、学習やプログラムに関することであるとか、あるいは、悟りやエクスタシーに関するものまで、相当、広範囲に深く説明していた感じだね。そして、それらを、丁寧に説明するとき、イエスは様々な例えを使ったのだろうと思う。でも、昔のことだから、パソコンやエンジンは無かったわけで、それらを例えに使えなかった。でも、心の働き、つまり、プロセスを説明しようとして、農業や漁業などが、当時の共通常識だから、それらを使って話をしたのだろうね」

「なるほど。では、この漁師と魚の例えは、具体的には、何の説明に使ったのでしょうか。笑雲先生」

「実は、これがなかなか分かりにくい。というか、もう少し、例え話が長ければ、特定しやすいのだが」

「特定しにくいというのは、何通りか考えられるということですか。笑雲先生」

「そうだね。何通りか考えられる。選び出す話だから、例えば、瞑想の棚上げのことを言っているのかもしれないし、思考の進む様子を言っているのかもしれない。あるいは、記憶情報とそうでない情報を分けることを言っているのかもしれないし、プログラム抜去のことを言っているのかもしれない。はたまた、プログラムの一気抜き後の再学習のことをいっているのかもしれない」

「いろいろありますね」

「そうだね。しかし、要点は、『沢山あるなかから選んで、後は捨てる』ということの例えだ。心の働きのいろいろな場面に適応ができるものだね。しかし、そうだとすると、それは、決して『天の国』の話でもなければ、『神の国』の話でもない。『人間は』という大くくりの話でもない。おそらく、多分、よくわからないが、瞑想時の棚上げのことを

言っているのだろうか」

「どうですか」

「この例えでは、選ぶのがたやすいということも、もうひとつのポイントになっているからね」

「なるほど。では、棚上げのどの部分のことを言っているのでしょうか？」

「では、その線で説明してみよう」

「はい、お願いします」

イエスは、多分、棚上げのことを話していたのだらうと思います。そう仮定してみます。すると、こんな風に言っていたのかもしれない。

「いいかい、トマス。出てきた案件をどんどん棚上げすれば、良いのだ。例えば、出てきた心配事を、これは神様にお任せしますでも良いし、後で考えようでも良いし、これはまた、あの案件かと風呂敷に包んでもよい。とにかく、棚上げの方法はいろいろあるが、その案件をあれこれ考えずに、素早く棚上げすることだ。いつまでもそのことを考えない。それが大切だ」

「でも、イエス様」

「なんだい、トマス」

「さきほど、案件は、小さいものから棚上げするのではなく、大きいものから順に棚上げて行くとおっしゃっていましたが、いろいろな心配事があって、どれから、棚上げしようかと迷ってしまいますが」

「ああ、なるほど、でも大丈夫だ。マインドは賢いから、まるで、漁夫が網を海に投じるようなものだ。彼はそれを小魚で満たして、海から引き上げる。そして、それらの中に彼は、一匹の大きな良い魚を見出す。彼は小魚を全部海に投じ、彼は大きな魚を選び出して、苦勞するところがない。このように、マインドは、マインドにとって一番大きな心配事、懸案事項を、やすやすと見つけて持ってくるわけだ。だから、取り上げて器に入れる、つまり、棚上げすれば良いだけだ」

「大きいか小さいかを気にしないで、持ってきたものをどんどん棚上げすれば良いということですね」

「そうだね。トマス。なぜなら、マインドは、賢いから、小さい案件は、打ち捨てておいて、大きいものからちゃんと順に選び出して行くということだ」

「なるほど。ですね。イエス様」

「いいかい、トマス。これは瞑想中でなくても、普段でも同じだよ。マインドは、一番気になるものから、考えようとする。もちろん、マインドの基準で一番大事と思っているわけだが、とにかく、一番大事なことから考えようとする。そして、それが済んだら、次を考える。それが済んだら、また次を考える。と思考の対象が変わっていく」

「では、同じ案件が済まなかったら、次に行けないのですか」

「一つのことが済まなかったら、普通、次に行けないから、同じこと何度でも考える。すると、その思考は、スピードが上がってくるし、その思考が通ったアタマの中の通り道は、砂埃が舞い上がるようになる。そして、あつと言う間に、アタマが暗くなっていく」

「砂埃で暗くなるのですか」

「ああ、そうだ。砂埃が天を覆って暗くなる。同じ心配ばかりしているとアタマが暗くなるだろう」

「そうですね。暗くなりますね。でも、以前は、芥子(からし)の種を播くと、小さな種でも、あつという間に大きくなって、天をも覆うくらいになり、アタマが暗くなるという話がありました。あれと同じですか」

「そうだ。トマス、その例えと同じだ。だから、そうなる前に、棚上げする。その考えを中止することが大切なのだ。そうすれば、いつでも心は爽やかな青空のままで居れるわけだ」

「なるほど」

このあたりは、アタマの中で思考がどのように進むかについての説明で、それを「種」や「発芽」や「成長」に例えています。他にもこのような例え話が沢山残っています。

しかし、それらが、思考の過程を説明しているという認識が、たぶん、福音書の編者には、ないようですので、あ

ちこちに、分散して、訳のわからない話になってしまっているような感じです。
次の第9項も、種の話が続きます。

■ (No.009)

(9) Jesus said, "Now the sower went out, took a handful (of seeds), and scattered them. Some fell on the road; the birds came and gathered them up. Others fell on the rock, did not take root in the soil, and did not produce ears. And others fell on thorns; they choked the seed (s) and worms ate them. And others fell on the good soil and it produced good fruit: it bore sixty per measure and a hundred and twenty per measure."

(9) Jesus said, "Look, the sower went out, took a handful (of seeds), and scattered (them). Some fell on the road, and the birds came and gathered them. Others fell on rock, and they didn't take root in the soil and didn't produce heads of grain. Others fell on thorns, and they choked the seeds and worms ate them. And others fell on good soil, and it produced a good crop: it yielded sixty per measure and one hundred twenty per measure."

(9) イエスが言った。「見よ、種まきが出て行った。彼はその手に種を満たして蒔いた。いくつかは道に落ちた。鳥が来てそれらを食べてしまった。他の種は岩地に落ちた。そして根を地に送らず、穂を天上に出さなかった。そして他の種は、茨に落ちた。そして、それは良い実を天に向かって出した。それは、60倍、120倍になった。」

「笑雲先生、これは、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカの福音書)にも並行個所のあるセンテンスですね」

「そうだね。どれも、ほとんど同じ例えだが、一応全部みてみようか」

「はい」

マタイの福音書 13章 03-09

「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。」

ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。

ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

マルコの福音書 第4章 03-09

「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。」

また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」

そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

ルカの福音書第8章 05-08

「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しつぶさってしまった。」

また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスはこのように話して、「聞く耳のある者は聞きなさい」と大声で言われた。

「笑雲先生、ほとんど同じですね。そして、その解説もそれぞれついていますが、それもほとんど同じです。たとえば、マルコでは、次の用に解説しています。

『種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。』と

「なるほど。そのように解説しているのか。巧みな解釈だが、イエスはそうは言わなかったらうね」

「なぜですか」

「この解説だと、もともと救われる人は救われるが、そうでない人の救いようがない話だからね。良い土地を持っている人は、収穫ができるが、岩場の土地の人は収穫できないということだ。そのような愛のない言い方をイエスはしないのではないかと思う。一人でも多くの人を救うのがイエスの望みだから、救いの無い言い方はしないはずだ。したがってこの聖書の解説は、後からの人が、この例え話の本当の意味が分からなくなって、無理やり解説を付けた感じに思えるね。『聞く耳を持っている人は聞きなさい』というの、ちょっと高圧的な言い方だね。本当にイエスのような愛に満ちた人が、そのように言ったとは、私にはどうしても思えないね」

「そうですか。では、もともと、これは何の例えだったのでしょうか、笑雲先生」

「そうだね。これは、『思考の種』の例えだとすると、とてもびったり来るね。とても巧みな例えになっている」

「どのように、巧みなのですか」

「では、それを説明しよう」

瞑想の浄化3手順は、「集中」「気付き」「棚上げ」で、「思考の種」をマインドの机上から片付けて行きます。これは、その「思考の種」について、イエスが、色々なパターンに例えた話ではないかと思われます。

「思考の種」というと範囲が広いので、わかりやすく「心配の種」にしましょう。その心配の種が成長するかしないかは、いろいろな条件によるということの例え話です。

(1) 種は道に落ちて、鳥が食べてしまった。

心配の種はあるし、その心配で、心は乱れているのだが、例えば、その時電話が掛ってきて、「あの件は、大丈夫でした。心配おかけしました」みたいなことを言われると、一気にその心配が種ごと消えてしまうようなものです。外部の要因で、その種そのものが取り去られるようなものです。鳥が来て食べてしまった。とても上手い例えだと思えます。

(2) 種は石地に落ちて、芽が出たが枯れてしまった。

心配は、一応発芽したのだが、それを増長することがない場合です。例えば、「これは心配だけど、でも、以前も何とか、無事切り抜けられたから、今回も、きっと大丈夫だろう」とか「出来ものが出来たけど、癌だろうか、なんだろうか」と一応心配しますが、「まあ、様子を見よう」などと、それ以上は心配を膨らませない場合です。心配の種に、自分から水分や養分を与えなければ、それは成長しません。逆に、心配の種に「癌だったらどうしよう。どうしよう。ああ、心配だ。どうしよう」と水や養分を与えていると、夜も寝られないくらい心配が大きくなって苦しくなっていきます。そうではなくて、「まあ、様子を見よう」くらいにしておく、いつのまにか、その心配を忘れてしまいます。まるで、種が石地に落ちたようなものです。上手い例えだと思えます。

(3) 茨の中に落ちて、芽が出たが茨も一緒に伸びて、伸びることができなかった。

これは、心配の種が発芽して伸びるのですが、それより、もっと大きな心配が起こってきて、その心配は忘れ去られるようなものです。例えば、「あのプレゼン、もう少し丁寧に説明しておけばよかったなあ。ちょっと心配だ

なあ」という「心配」があったとしますが、どこからか、「自分の会社が倒産するかもしれない」という噂を聞くと、プレゼンの説明の心配はどこかに行ってしまう、別の大きな心配、例えば、「失業するかもしれない」が心を占めます。そして、それより小さな心配は、消えてしまうと言うパターンです。茨も一緒に伸びて、覆ってしまったというのは、とても上手い例えだと思います。

(4) 良い土地に落ちて、生長して、百倍の実を結んだ。

これは、心配することを邪魔するものが何もない場合に、あっという間に成長して、さらに、多くの心配の種を結んでしまったということです。

この例えのあとに、「芥子の種」の例えもあります。

これも、「思考の種」あるいは、「心配の種」の例えです。芥子のような小さな心配の種であっても、それを考え始めると、あっという間に、アタマの中で成長して、天をも覆うばかりの大木になり、アタマの中がたちまち暗くなるという例えです。

ついでに、これも、共観福音書の該当箇所を列挙しておきましょう。

トマスの福音書 20

弟子達が言った。「天国は何に似ているか、私たちに教えてください。」彼が彼らに言った。「それは、一粒の芥子のようなものである。それは、どんな種より小さい。しかし、それが耕されている地に落ちると、地は大きな枝をつくり、空の鳥の隠れ場となる。」

マタイの福音書 第13章 31-32

イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

マルコの福音書 第4章 31-32

「それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

「笑雲先生、天の国が、芥子のようなものだとされても、どんな天国が分かりませんね」

「そうだね。小松茸。普通に読むと、天国が芥子の種に似ているなんていわれても、いったい何を言っているのか、分からないね。不思議な説明に聞こえるね」

「しかし、心配の種が、マインドの中で成長する様子を説明したとなると、納得ですね」

「そうだね。とても分かり易いね」

「もし、イエスが本当にそのように、心配の種の話の説明をしていたとすると、どうして、それが、こんな風になってしまったのでしょうかね」

「さあ、それは、分からない。分からないが、もし、変えたのなら、変えた人の目的があったのだろうね」

「どんな、目的ですか」

「さあ、知らない」

「あ、出た。笑雲先生、得意の、『知らない』が。本当は知っているのに言わないでしょ、それって」

「いや、いや、本当に知らない。変わったのか、変わってないのか、どんな目的があったのか、無かったのか、それを調べることも興味深いことだとは思いますが、ここでは私達のテーマの外だ。このテーマは、瞑想や瞑想の修行の説明に使えるような例え話が沢山あるので、それを使って、瞑想や瞑想の修行の説明を試みようということだからね」

「はい、そうですね」

「だから、例え話さえ、しっかり、残っていれば、それを使って、私達のテーマを進めていける。その例え話を、教会や聖書ではどのように解釈しているかは、ここでは問題にしないでいいわけだ」

「たしかに、そうですね。なるほど。そうすると、あれですね、トマスの福音書は、あまり、解釈が書いてない分、このテーマを進めるのに、好都合ですね」

「そうだね。小松茸。とても好都合だ。でも他の福音書も、解説のところを飛ばして読めば同じことだけだね。ただ、トマスだけにある例えもあるけど」

「なるほど。では、その方針で、さらに、次に進みましょう」

「了解」

■ (No.010)

(10) Jesus said, "I have cast fire upon the world, and see, I am guarding it until it blazes."

(10) Jesus said, "I have cast fire upon the world, and look, I'm guarding it until it blazes."

(10) イエスが言った、「私は火をこの世に投じた。そして、見よ、私はそれを、それが燃えるまで守る」

これは、ルカの福音書の第12章49に「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」というのがあります。それと並行しています。

「笑雲先生、これは、火が広がって行くことを願っているということですね」

「そうだね。そして、その火とは、イエスの教えということだろうね」

「イエスはキリスト教会とかが広まるのを意識していたのですか」

「そうではない感じだね。教会ではなくて、教えそのものだろう。イエスは、瞑想やその修行の方法を教えていたとすると、その方法が広まることを願っていたと思われるね。こうすれば、マインドを制御できて、天国の気分になれるよ。楽しくなれますよ。そんなことを説いていたのではないかと思う。その方法が広まることは、当然、願っていたと思われるね」

「なるほど。で、イエスの死後、そのように広まったのですか。笑雲先生」

「さあ、イエスの思ったとおりに、その方法が広まったのかどうか、それは、イエスに聞いてみないとわからないね」

「それは、無理ですね」

「そうだね。しかし、どうであれ、私達は、イエスの多くの例えを2000年経た今でも、ちゃんと手にしているのだから、有難いことだ」

「そうですね」

■ (No.013)

(13) Jesus said to his disciples, "Compare me to someone and tell me whom I am like."

Simon Peter said to him, "You are like a righteous angel."

Matthew said to him, "You are like a wise philosopher."

Thomas said to him, "Master, my mouth is wholly incapable of saying whom you are like."

Jesus said, "I am not your master. Because you have drunk, you have become intoxicated from the bubbling spring which I have measured out."

And he took him and withdrew and told him three things. When Thomas returned to his companions, they asked him, "What did Jesus say to you?"

Thomas said to them, "If I tell you one of the things which he told me, you will pick up stones and throw them at me; a fire will come out of the stones and burn you up."

(13) Jesus said to his disciples, "Compare me to something and tell me what I am like."

Simon Peter said to him, "You are like a just messenger."